

グローバル人材の育成を意識した国際寮の活用

—国際寮の社会的機能から導かれる寮教育—

The Use of International Dormitory to Cultivate

Students with Global Awareness:

Dormitory Education Based on Social Functions of

International Dormitory

麗澤大学日本語教育センター長 正宗 鈴香

MASAMUNE Suzuka

(Director, Center for Japanese Language Education, Reitaku University)

キーワード：国際寮、教育的視点、外国人留学生宿舍

1. はじめに

外国人留学生の受入れは、各国の人材育成への貢献のみならず、我が国の学生等の学修環境の充実や我が国の大学等の国際化等に大きく貢献するものとされ、平成32年までに受け入れる外国人留学生を14万人（平成20年当時）から30万人に倍増する計画が政府から示されている（文部科学省「留学生30万人計画」）。外国人留学生の住環境整備は、この「留学生30万人計画」の重要課題と位置づけられており、住環境を整備するに当たっては「外国人留学生と我が国の学生等や地域住民が交流する機会を創出することが重要である」と提言されている（「留学生30万人計画の実現に向けた留学生の住環境支援の在り方に関する検討会報告書」）。

黒田（2015）は、国際化（Internationalization）やグローバル化（Globalization）は21世紀における教育、特に高等教育のキーワードとして認識され、個々の教育機関や国レベルの行政機構、そして国際社会における教育に関する議論の中心的な課題となってきたとしている。グローバル人材の育成が重要課題となっている大学において、大学が設置する学生寮もその一端を担う場として認識されるようになってきている。近年学生寮の多くが、外国人留学生と日本人学生が寮生活を共にする「国

際寮」として設置され、寮での交流を通して国際感覚を身に付けることを謳っている。江淵（1991）は、このような外国人留学生と日本人学生と一緒に住む「総合主義」での居住形態が友人関係を構築するための交流を促進するには望ましいとしている。しかし一方で、文化的背景が異なる者同士が同じ空間を共有するだけでは良好な関係が実現しないことも多くの研究で指摘されている（横田1991a、下田・田中2007他）。さらに黒田（2015）は、交流だけでは、国際理解が進んだり平和が達成されたりするものではないと主張している。これらのことは、外国人学生と日本人学生が入寮する物理的空間を提供すればいいという単純なものではなく、それぞれの国際寮においてどのような人材を育成するのかを明確にし、そのためのしくみや教育的視点を持たせることが必要となってくることを示唆している。

原田（2012）は、大学生の留学には、1）外国語の習得、2）異文化コミュニケーション・異文化接触および異文化理解の体験、3）青年期後期における人間的成長と自己形成の3点の目的と課題があるとしている。学生寮は、こういった外国人留学生の留学目的をより効果的に実現させる可能性を持つ場であることは間違いのないであろう。しかし、学生寮における外国人留学生と日本人学生の対人関係構築のプロセスを考察した出口・八島（2008）では、外国人留学生は「距離感のある日本人学生集団」として集団に違和感を感じ、8カ月目には日本人学生コミュニティへの不参加を表明したとし、良好な人間関係を実現するには課題も多いとしている。山川（2013）は学生寮における日本人と外国人留学生の友人関係構築について分析するなかで、混合寮の〔ルールの共有〕〔空間の共有〕〔時間の共有〕という三つの調和された環境の中で「留学生と日本人」という関係から「友人同士」という関係に変化していく過程が明らかになったとしており、友達関係や人間関係は自然に発生するものではなく、いくつかの条件が揃う必要性を示している。

一方で、国際寮で起こる様々な事象を通して得られる学習効果を検証したものはあまり見られない。そこで本論では、筆者が勤務する大学の国際寮に入寮した外国人留学生の実態把握を通して国際寮のもつ社会的機能を明らかにし、それらをどう寮教育につなげるかを考察する。

2. 国際寮「グローバル・ドミトリー」の運営理念と建築空間

本学は寮教育を建学理念の柱として据えてきた歴史がある。時代に応じて変遷してきた寮の流れを受け継ぐ形で、2013年に国際寮「グローバル・ドミトリー」を新たに設置した。建学理念である「高い品性と専門性を備え、自分の考えを国際的に発信できる人材」の育成は、現在のグローバル人材の育成に通じるもので、グローバル・ドミトリーでは、交流の機会を作り出すための空間や異文化体験を通じた学びを促す寮運営の工夫がなされている。居住空間は、6つの個室と居間や台所を共用スペースとするユニットで形成され、寮内はこのユニットを複数有する設計になっている。寮運営は、「自治」をキーワードに自分達で試行錯誤しながら共同生活の管理や集団行動をやり遂げる経験を通して

成長することに重きを置いている。現在、外国人留学生在が定員の約半数を占め、各ユニットは外国人留学生と日本人学生が同数になるように組まれている。ユニット・リーダー、フロアー・リーダーを置き、リーダーを中心に自分達で課題を見つけ問題解決することを課しており、大学はこういった学生主体による運営のサポート、リーダー研修等を実施している。

3. 外国人留学生の実態調査から見てきたもの

このような国際寮に入寮した外国人留学生は寮生活を通して何を得てどのように感じているのだろうか。その実態を探るため、1年間入寮した外国人留学生22名に意識調査を実施した。調査期間は2014年7月18日～7月30日で、調査方法は事前の調査用紙の記入とそれに基づく45分程度の対面でのインタビューである。インタビューで得られた言語情報は、質的研究に用いられるSCAT (Steps for Coding and Theorization) 手法を用いテキストからコーディングを繰り返し、理論概念、カテゴリーを抽出した。SCAT分析の結果、「共同体(寮コミュニティ)に対する認識」「異文化理解・異文化適応」「日本語力向上」「自己成長・アイデンティティ更新」の上位カテゴリーが抽出された(詳しくは、正宗2015を参照)。以下に上位カテゴリーごとに調査協力者から得られた記述を述べる。

3. 1 共同体(寮コミュニティ)に対する認識

快適な共同生活をするためには寮全体のルール、自分達で決めたルールを自他ともに守る重要性を指摘する記述が多かった。ルールを守らない寮生には注意した、当番を代わってあげたという記述も見られた。ルールが守られない場合には改善策を提案したことがある、といった記述も見られ、自分達が主体となるユニット運営、状況改善に向けて行動を起こす、といった共同体の成員としての自覚が外国人留学生にもみられることが分かった。一方で、門限があることや男子寮、女子寮では行き来ができないといった規則に対しては疑問を感じながらもルールとして割り切っている寮生が多いことも明らかになった。また、日本人学生が使う言い方を真似て、寮の中で交わされる特徴的な挨拶や言い回しなどを外国人留学生は早い段階から使っていた。日本人と同じような言い方をすることで寮の一員になったと感じたといった記述が見られた。これらのことから、新しい寮コミュニティに受け入れられるための努力をしていたことが分かる。

共同体での人間関係構築に関するものとして、外国人留学生と日本人学生が「対等な立場」であったことが良好な人間関係を作ることができた理由であるという記述があった。この対等な立場とは、外国人留学生だからといって遠慮したり特別扱いされなかった、変な好奇心を持たれることなく同じ大学生として接してくれた、といったものである。寮では、寮に関わることが話題の中心となるため、共通の課題解決に向けて意見交換することで互いの考え方がわかり人間関係が作りやすかったという記述がいくつか見られた。

以上のことから、「ルールの共有」「課題の共有」が共同体の一員としての自覚を持たせ、「共通の話題」「対等な立場」「問題解決のための協力や意見交換」といったことが人間関係の構築を促進していたと考えることができる。

3. 2 異文化理解・異文化適応に対する態度

調査からは、違う国／地域間で違いがあるのは当たり前でその時は話し合う、自分の視点だけで見たら相手を正確に理解できない、相手をよく観察する、すぐに判断しない、といった異文化コンテキストでとるべき自分の行動は比較的良好に分かっていることが明らかになった。一方で、互いの距離感がなかなか縮まらない、個々の都合よりもルールが優先される、やりとりがすぐ終わってしまい深い話ができない、本人に直接言わずに全体に注意してするといった、日本人にみられる特有な考えや行動に対し、理解は示すものの、同じように考えたり行動するには抵抗があることを示す記述もみられた。なかには、しばらく日本で生活したら自然にできるようになるかもしれないが、今はまだ無理という記述もあり、1年間という期間では同じようには行動できない文化的行動も明らかになってきた。こういったことから、異文化理解・異文化適応にはさほど時間を要さないものから時間を要するものまで幅があることが分かる。

3. 3 日本語活用の広がり

個々の日本語力によって、日本語力の活用方法は異なっていた。初級レベルの学生は、授業で学んだ表現を寮で実際に使ってみたという記述が中心で、授業でやったことを実践する場となっていることがわかった。上級レベルになると授業で扱った内容や課題を寮に持ち帰り、日本語で日本人や他の国からの外国人留学生と議論し、考えを深めていく過程でどういった日本語を使えばいいか考える機会を得たという記述がみられるようになっている。日本語そのものというより、コンテキストや目的に応じて日本語で表現する力が鍛えられていることが窺われ、時間を気にせずに世界中から集まった仲間と議論を深められる環境は非常に貴重だったと言えよう。

3. 4 人間的成長と自己形成の意識化

日本人と接する機会が多い生活を送ることで、自分に自信がついた、明るくなった、積極的になった、思っていた以上に何でもできるようになった、といった記述が見られた。このような成長に加え、日本で通用する部分と通用しない部分が自分の中で明らかになり、自分について真剣に考えたといった記述や、国にいたときは自分と異なる考え方をする人は排除することが効率的と考えていたが寮生活で違う意見が自分の新しい考えを形作ることを知って考えが変わったという記述もあった。様々な経験が新たな気づき、人間的成長、自己形成を促していることが確認できた。

4. 国際寮が有する社会教育的機能と寮の教育力の可能性

上述した4つの上位カテゴリーは、国際寮「グローバル・ドミトリー」がもつ社会教育的機能と考えることができ、以下のように整理できる。

- ・新しい寮環境を自分の居場所としていく力が身につく
- ・仲間と協力して自分たちで共同体（コミュニティ）を作る力が身につく
- ・異文化理解力、異文化適応力が身につく
- ・日本語を運用する力が身につく
- ・大学で学んだことを仲間と共有しながら学びを深める力が身につく

それでは、国際寮に教育的視点を取り入れるには、どのような方法が考えられるのだろうか。次にこれらの社会教育的機能について考察を行う。

4. 1 自分の居場所をつくる力、異文化理解力、異文化適応力

外国人留学生にとって寮が自分の「居場所」となるにはいくつかの過程があり、調査からは日本人寮生から様々なサポートを得ながら寮環境に順応していることがわかった。入寮時にルール説明を受けることから始まり、日々のあいさつのしかたや互いの声掛けのしかた、寮の行事への参加、数か月後にはユニット・リーダーになったり後輩に教える立場になったりなど、寮が自分の居場所として違和感がなくなる過程が確認された。居心地よい場所があり一緒にいて心地好いと感じる相手がいることは、充実した寮生活につながる。山川（2012）は、1つのコミュニティが外国人留学生にとって自分の居場所になるまでの過程を、「コミュニティへの参加」→「相手との時間的・空間的共有」→「友人関係構築」→「コミュニティへの所属感」→「自分の居場所」と考えられるとしている。当然ながらこの過程は時間を要するものであるが、留学期間が限られている外国人留学生については、無理なくこの過程を踏ませる工夫も必要だと思われる。異なる言語と社会・文化の中で暮らす留学生活においては、外国人留学生は社会文化的な諸側面で、不確実で不安定な要素を体験することが多く、心理的・精神的・健康的な不安に対処する方法として、原田（2012）は、ソーシャル・サポート（周囲の人びとからの援助）の果たす役割は大きいとしている。李（2011）は、子どもたちの居場所を考える上で、「居場所は自生的なものではなく、大人の支援を通して作られるものである（中略）。また、居場所への参加は常に予定調和的ではなく、多様な子どもが来て、さまざまな葛藤と問題が絡んでいるため、大人の働きかけを過小視してはいけない」としている。これらのことは、外国人留学生にも当てはめて考えることができる。また、外国人留学生はこの居場所探しをする過程において、異文化に対する理解や適応も同時にしなくてはならないという複雑な状況にいると考えられる。この2つの過程が複雑に絡んでいる状況において、原田や李が指摘するように周囲からのサポートはますます不可

欠なものになると思われる。サポートする側となる寮生には、外国人留学生はこのような複雑な過程を踏みながら異文化適応や居場所探しをしていることへの理解を深め、その時々でのサポートのしかたがあるといった意識を持たせることが大切であろう。外国人留学生に対しては、こういった過程があるなかで様々な葛藤、戸惑い、ときには不快に思うことがあってもそれらは必要なステップであり、そういった状況を他の寮生と共有して理解や解決にむすびつける努力が必要であることを伝えていくことが有効であると思われる。

4. 2 共同体を協力してつくる力

共同体の一員としての責任を持ち適切かつ効果的に行動ができる能力は、グローバル化する社会において大切な能力の一つである。生活の場であるコミュニティをどのように形成していくのかを実践を通して学ぶのに寮環境は適していると考えられる。目の前の具体的な問題に対し、これまでの自国でのやり方とは違う価値観や判断基準でもって解決する経験に外国人留学生は新しい視点を見出していたことが今回の実態調査では明らかになっている。多様な視点を持ち異文化コンテキストにおいて適切に表出するためには、異なる判断基準や価値観などを理解することが重要である。寮生には、違いや不明点を確認する機会を逃さず、コミュニケーションの必要性や目の前で起こっていることを明らかにしていく意識が大切であることを伝えた上で、実際に行動を起こし、振り返り、次の行動につなげるといった経験をもたせることに意味があると思われる。その過程において、互いに尊重し違いを受入れる土壌を作ることも忘れてはならない。

4. 3 学生としての学びを深める力

寮生同士の自発的な議論や問いかけは、自らが問題意識を持ち自由に考えを膨らませていくことが可能で、授業とは違った学びが期待できる。また、信頼できる関係になった寮生と社会問題や人生観などについての意見交換は貴重だったという記述からも留学の質を高める環境を提供することは重要であることが分かる。一方で、こういったことが自主的にできるためには一定以上の日本語力が必要となってくる。言語能力のレベルと異文化社会適応への影響を考察した原田(2013)では、適応には日本語力のレベル群が関与することが示され、異文化社会への適応が円滑にされるためには、日本語力のレベル群別の助言や指導が必要となることが示唆されたとしている。日本語力に応じて留学で得るものが違ってくるのは否めないが、日本語を教わったり教えるだけでなく、様々な方法を用いて互いの考え方なども知る努力を続ける大切さを説くことも必要であろう。

5. おわりに

学生寮の最大の特徴は、同じ年代の者が生活面でも学習面においても互いに刺激し主体的に学び合

える空間であることである。この空間や時間を有益なものにするためには、寮で起こるさまざまなことを偶発的に起こったことで終わらせず、理念と方法を兼ね備えた教育的レベルまで押し上げ、それらを意識しながら寮生活を送らせることで教育的視点を導入することができるのではないかと思われる。この分野での研究は始まったばかりであるが、教育的視野を入れた様々な形の学びや寮環境の提供は、日本文化や日本人の考え方の理解を深め、日本人と多くの時間や経験を共有する有意義な留学生活、ひいては国際的に通用する力を向上させることにつながると思われる。

参考文献

- Allport, G. W. (1954) *The nature of prejudice*. Reading, MA: Addison-Wesley.
- Bryam, M. (1997) *Teaching and assessing intercultural communicative competence*, Cleveon : Multilingual Matters.
- 石井敏・久米昭元（編集）（2013）『異文化コミュニケーション事典』有斐閣選書
- 石井敏他（2000）『異文化コミュニケーションハンドブック』春風社
- 井出元（2014）「麗澤大学の学生寮—全人教育の理想」『麗澤教育』20, 23-30
- 岩本廣美・細谷恵子（2005）「駄菓子屋の教育的機能—子どもと店員の関わりを通して—」『教育実践総合センター研究紀要』14, 65-74
- 江淵一公（1991）「在日留学生と異文化間教育」『異文化間教育』5号, 4-20
- 大谷尚（2008a）「4ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案—着手しやすく小規模データにも適応可能な理論化の手続き—」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学）』54（2）, 27-44
- 大谷尚（2011）「SCAT: Steps for Coding and Theorization—明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法—」『感性工学』10（3）, 115-160
- 加藤智崇・杉山精一・牧野路子・内藤徹（2014）「長期メンテナンス受診患者における患者背景の質的解析」『日本歯科保存学雑誌』57(3), 268-275
- 黒田一雄（2015）「高等教育グローバル化の理論的展望—国際社会への貢献を目指して—」ウェブマガジン『留学交流』5月号, Vol. 50
- ケイパー・マティアス（2008）「異文化能力の概念化と応用—批判的再考—」立教大学院異文化コミュニケーション研究科修士論文
- 下田薫菜・田中共子（2007）「在日外国人留学生の感じる文化間距離—集団主義—個人主義、高—低コンテキストの観点から」『留学生教育』12, 25-36
- 鈴木杏里・元岡展久・桂瑠以（2012）「女子大学大学寮における寮室と共用空間の構成」『高等教育と学生支援：お茶の水女子大学教育機構紀要』2, 14-21

- 高橋聡 (2012) 「言語教育における、ことばと自己アイデンティティ」『言語文化教育研究』10(2), 37-55
- 田中共子 (2000) 『留学生のソーシャル・ネットワークとソーシャル・スキル』ナカニシヤ出版
- 田中共子・藤原武弘 (1992) 「在日留学生の対人行動上の困難—異文化適応を促進するための日本のソーシャル・スキルの検討—」『社会心理学研究』7(2), 92-101
- 竹内愛 (2012) 「『異文化理解能力』の定義に関する基礎研究」『共愛学園前橋国際大学論集』12, 105-112
- 出口朋美・八島智子 (2008) 「実践共同体としての大学寮における留学生と日本人学生の対人関係」『多文化関係学』5, 33-47
- 原田登美 (2013) 「言語能力のレベル差と異文化社会適応への影響：ホームステイをした留学生の日本語力は適応にどう関わるか」『言語と文化』17, 241-268
- 原田登美 (2012) 「ソーシャル・サポートにおけるホームステイの有益なサポートと有益でないサポート—留学生から見たホームステイ評価」『言語と文化』16, 155-188
- 中山理 (2014) 「グローバル人材を育成する国際寮『グローバル・ドミトリー』」『麗澤教育』20, 16-22
- 正宗鈴香 (2015) 「寮生活における留学生の異文化社会適応、人格形成、言語習得に関する事例研究—国際寮の教育的機能の可能性—」『麗澤大学紀要』98, 63-72
- 松井孝浩・中井雅也 (2010) 「小規模実践研究グループにおける実践の振り返り—参加教員へのインタビュー調査分析から—」WEB版日本語教育実践研究フォーラム報告
- 文部科学省「今後の留学生政策について」平成25年8月8日付
- 文部科学省「留学生30万人計画の実現に向けた留学生の住環境支援の在り方に関する検討会報告書」平成26年8月8日付
- 森邦明 (2013) 「大学の戦略と教育可能性に関する学生寮シンポジウムの報告」『福岡女子大学文学部・国際文理学部紀要「文藝と思想」』77, 1-19
- 横田雅弘 (1991b) 「留学生と日本人学生の親密化に関する研究」『異文化理解教育』5, 81-97
- 山川史 (2012) 「『自分の居場所探し』としてのソーシャル・ネットワーク形成」『ICU日本語教育研究』(8), 46-63
- 山川史 (2013) 「寮に住む留学生と日本人学生の友人関係構築に関する事例研究」『異文化間教育』38, 100-115
- 李 智 (2011) 「居場所づくりと支援者の役割 - 岩手県奥州市ホワイトキャンパスを事例に -」『東北大学大学院教育学研年報』第60集・第1号, 215-229